

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

| | |
|------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| Title | 恵利武さんのこと：回顧録（二） |
| Author(s) | 高田，保馬 |
| Citation | 龍南，238：33-35 |
| Issue date | 1937-10-30 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/7404 |
| Right | |

高等學校では私もよく食つた凱旋饅頭を五十も食つて、あとでビートル散をなめたりして居たらしい。

大學は農科へ入學して、農藝化學を修めて居たが、其の内に烈しい神經衰弱に罹つて學校を休學した。それ切りどうしても再び出ようとは云はなかつたのを、私が留學から歸つた時に無理にすゝめて出る事にはなつたが、それでも矢張り學校は缺席勝ちであつた。

其頃は私はもう青年ではなかつた。空想から現實の世界へ踏込んで、功名心かられて懸命に努力し、あくせくして居た。さうして亮の學校をなまける心持に共鳴し難くなつて居た。私の眼から見ると唯自分の心の中へ中へと引込んで行く亮を、どうしても引き立てて外側へ向け直してやる事が自分の務のやうに思つて居たので、機會ある毎に口を酸^すして説法のやうな事を聞かせた。（改造社版、現代日本文學全集第五十八篇より轉載。）

惠利武さんのこと

高 田 保 馬

私はかつて、武夫原の歌の作者惠利さんについて書いたことがある。その後、何か書いて追補をしたいと思つたが、どうも資料蒐集の積極的な努力をしない爲に新に聞きこむこともない。若干かき残した事を記しつけてみよう。

此七月の下旬、用あつて福岡に下車したとき、偶然材木町小林寺前を通つた。さきを急いでゐたので、墓參もしなかつたが、こゝがたしかに惠利氏の長へに眠れるところである。私は曾ての記憶を辿ると、停車場の近くのやうでもあり、海の近くのやうでもあると思つたが、やはり濱に近いところであつた。逝去されたのは多分明治四十四年春位のことであらう。武夫原の歌が出来てから五六年だけ生きてゐられたことになる。

惠利氏が五高に入られたのは明治三十四年。私は明治三十五年に三部一年生として入學してから一三ヶ月の後、明治三十五年の晩秋ごろに知り合となつたわけである。けれども當時は部もちがふので、さうまで度々交遊の機會があつたわけでもない。私は明治三十六年に一部一年生として再入學したが、それからの一年間に、月一回位は惠利氏其他の同志と共に文字通りの牛飲馬食の會合に参加した。會合そのものは極めて眞摯のものであつたが、何分元氣盛りの年頃であつたから一人當り牛肉百匁づゝ平げるのが慣例であつた。酔がまはると、惠利氏は、平素の沈黙にも似ず、快活な、しかし訥辯な、進んでいふとどうしても福岡辯のぬけきらぬ話し手であつた。明治三十七年七月、惠利氏のクラスの卒業前後にかつて記した會合が行はれたとき（日川の東岸、當時の辛島市長邸）、特に私を話し相手に選んで詳しい昔話をされるのであつた。その時、私は同氏が後輩としては私に最も多くの信頼を置かることに感激した。夏休が過ぎて九月になると、東京から度々のたよりが來たが、多くは當時はまだ物珍らしい繪葉書に記してあつた。三年のノートを俚につんで京町坂にかゝつたとき、遙に森の中の母校の赤煉瓦をのぞんだとき、といふ文句を未だに忘れ得ない。三十七年の九月に、同氏の修猷館の後輩、緒方大象氏（今長崎醫科大學教授）が其の紹介狀を持つて來られたとき、私が十年の知己の感を以て之を迎へたのも、緒方氏の人格の力でもあるがまた惠利氏に對する氣持の作用でもあつた。

惠利氏は身長高い方ではない、今から思ふと五尺二寸餘り、横にはつた、がっちりした体格であつた。柔道は黒帶であつたが、初段位とかいた事は記憶に誤りがあつたかも知れぬ。野球や庭球をやられた事はきかなかつた。演說會で姿を見ることは度々であつた。當時雜誌部の委員。他の龍南會委員は、野球部後藤文夫氏、總務池田秀雄氏、庭球部岩松玄十氏、端艇部藤野幹氏、同翌年田澤義輔氏、これ位を記憶してゐる。圓轉滑脱の才子とは全く正反對の性格、正直であつたから時には怒られることもあつたらうと思ふ。たゞ心の底は極めて優しい人であつた。あの朴訥の裏にかくされたる此詩人的情緒こそは、武夫原の歌を不朽ならしむるものであらう。

あの武夫原の歌の出來るときの事情について、注目すべきことが二ある。一は學内の事情である。明治三十六年から入

學試験の方法が改められて、五高の學生の構成に急激なる變化が來た。都會の氣風が目立つて入りこんで來た。これに對して、以前の校風を固守せねばならぬといふ氣持が學生の一部分に強かつた。舊制度の學生の最後の部分——明治三十七年の卒業生が當時の五高に送る歌として、浮華の風を戒め、剛毅朴訥を勸奨したのは當然のことである。他の一は日本の國情である。丁度、日露戦争といふ空前の大戦争の終つて間もないことである。國家的興奮のまださめぬ時ではあり、別して玄洋社精神の影響から免れなかつたと思はれる修猷館出身の惠利氏が、あの武夫原の歌の中に憂國の哀情を托せらるるのも、また餘りに自然のことである。

作曲者のことについては、後日を期したい。永井建子氏ではなからうかといふことを聞いたけれども、十時校長の調査によりて、さうでないといふことが明にされた。かへり見ると惠利氏と一たび袂を別つてから、春風秋雨三十餘年、其友情に感激しながらも、私は何ものをもそれに報いてゐない。せめては、武士原の歌の制作に關する當時の事情なりともきゝ集めて、記録に残したいと願ふのである（昭和十二年七月三十日午後）。

あの頃の思ひ出

齋藤 惣

剛毅朴訥と云ふ言葉は龍南の地を踏んでから何度か聞かされたことであらう。

今夏、御殿場東山荘に開かれた夏季學校に出席して、この標語をその儘にあらはして五高の連中を見た者が、君の昔も、あゝであつたかと質問されたには聊か恐縮した。それからそれへと絲をたぐる様、いま思ひ出に浮ぶ人や、自然や、事件を書き列ねて見る。